

日本乙姫心を探して

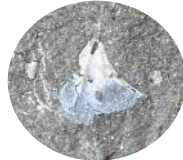
初めて投稿します。タイトルからしてロマンチックな話？ ニッポンオトヒメゴコロと読みます。実はロマンチックなものではなく180万年位の深海でできた黄和田層（上総層群下位）という地層に入っている貝化石です。写真は今回は採集できず悔しいのでネットから拾ってきました。



9月14日大東岬へ中央博物館地学科K先生とは秩父巡検以来の巡検（地学で実地調査の事です）です。私は10月の観察会の下見で近くまで来ていて、K先生は大東岬近くにある縄文時代の貝層を見たいという事で途中から合流しました。ここは千葉県でも珍しくこんなきれいな露頭が出ている所はあまりありません。厚い泥岩と砂岩とに挟まれて鍵層と言われている火山灰の層があり二カ月前にここで行われた観察会から

狙っていました。ここでは珍しいクリオネの化石（うそです）

カメガイ（翼足類カメガイ科）と言います。海産浮遊性の種なので貝を作りません。



また、生痕化石（巣穴の化石）や二枚貝の化石などもできました。さて問題のK先生お目当ての貝層（貝塚と違って自然にできた貝の層です）千葉県では印西市の木下貝層（千葉県の化石に指定）が有名です。



この丸印の所ですが途中の道が私有地となっていて近くに行けませんでした。（金網越しに写真だけ撮りました）左の写真は近くで偶然に見つけた浸食された洞窟でした。やはりここにも生痕化石が沢山見つかりました。ここは狭い場所に色々な化石が採集できそうなのでいつか化石採集会でもやりますかと、K先生と話をしました。

最後の写真は私が遅いお昼を食べている時目の前の岩礁に千葉県らしい地層これは褶曲と言います。（丸印の所）断層や地滑りなどで出来ます。また話が長くなりそうなのでこの話題は次回（何時だ?）とします。



蟹さんもいました

長嶺勝 （千葉市）

お知恵を拝借 キツリフネ？

鎌ヶ谷でかれこれ 20 年以上湧水や湿地の保全活動をしています。市内でも珍しくなった湧水の出る公園兼雨水貯留池「囃子水（はやしみず）公園」が私たちの活動場所。小さな公園ですが、周りを斜面林に囲まれ湧水でできた池があり、以前は谷津田だった部分は土を盛って芝生などをはって公園として整備したようですが、今ではおおむね湿地に戻ってしまいました。湧水を保護し、このような場所に適した植物が生えてきたら保護し、繁殖力の強いものは刈り取り…生き物がここで生まれ、また集まりやすい拠点となることを目指しています。

よくあることですが、何かしら植えていく人がいる。明らかに園芸種や湿地にそぐわないもの、この近辺にはないもの、出所の分からないものは処分することになっています。

さて、何年か前から戸惑っていることがあります。よい機会をいただいたので、経験と知識の豊富な皆様にお知恵を拝借。

この植物はある年、突然現れました。ツリフネソウによく似た黄色い花を咲かせます。キツリフネと思われましたがこの近辺のものではなさそうです。「誰かが植えたものだろうが来年は消えるに違いない。」とたかをくくっていたのですが 毎年6～7月頃からお目にかかることになりました。花の時期は長く、現在もまだ（あるいはまた？）咲いています。勢いは衰えず、生育場所を広げています。しかし、ある特定の場所（適度な日照の薄暗い湿地）以外には広がっていかないように見えます。これは本当に「キツリフネ」なのでしょうか。最近よくあるそっくりな外来種とか園芸種とかではないのでしょうか。この植物の正体について何かご存じでしたら教えてください。



写真提供：森 広幸氏

もう一つお知恵を拝借。

つい出来心？で 近くの湿地からカサスゲをほんの数株移植しました。数か月は後、恐ろしいまでの繁殖力で小さな池や水路をおおい尽くしました。この草は乾燥すると かたくなり、適度な弾力もあります。時間が経ってもあまり劣化する様子はありません。大量に収穫できるカサスゲを何かに利用できないのでしょうか。と何とかの一つ覚えのカエルと馬をひたすら折りながら考えるのでした・・・。

鎌ヶ谷市 多紀晶子

手をつなぐ

7月24日の松戸市21世紀の森と広場、6つのポイントを回ってクイズを解いていく「夏休みの自然探検ラリー」でのことです。

イネのクイズが終わって、番外でオオバコのスジだし競争をやってみました。子どもはもちろん、お父さんやお母さんもスジだしは初めてのようでした。ひとしきりこの遊びを楽しみ、「オオバコに出会ったらやってみてね」と話しながら、次のポイントを目指しました。隣を歩いている子の手が伸びてきました。手をつなごうという態勢に入っています。コロナ感染対策でヒジタッチしているときだから、「手をつないだらまずいよ」と思って、「もしもし」と声をかけました。お父さんと間違えたのではなく、私と手をつなぎたかったようでした。

そういえば、コロナ感染対策が始まる前、2019年8月に坂田ヶ池総合公園で、同じ光景に出会っていました。虫を探し、サワガニ、アマガエル獲りに走り回っていた時です。

虫取りを終えて歩きながら、階段にかかると、子どもの手が伸びてきて、つなぎたいポーズです。手を取って登り始めると、ひょろっと動くものを発見。その子の手が離れて昆虫をつかまえました。オオヒラタシテムシです。森の掃除屋さんだよと伝えると満足したような表情でした。

子どもたちと観察会をしていると、和んだり、馴染んだりする方法にたけているなと思います。指導員の名札を読み取って名前を呼んで懐くとか、「どこから来たの」と質問をしてきたりして打ち解ける。僕の「味方になってね」という思いが見えて、とても分かり易いです。ほんの短い時間なのに、子どもにとっては大事な時間なのかもしれません。



手はつながっているかな？

私の方から言葉かけを多くして、「見ているよ、注目しているよ」と続けると表情が少し変わってくるように感じます。「僕のことみてほしいんだ」と話しかけている。それに答える。余裕のないときは難しい。けれども最低限見るようにしている。そのポーズだけは相手にわかるようにしておく。そこが大事なのかな。

虫探しを終え、管理センターに入り、生き物は命をつないで世界が成り立っている、生態系ピラミッドの話になりました。食べる食べられるというのが分かりやすい命のつなぎ方です。つなぎ方が生態系ピラミッドの話として数年たって、ひょこっと顔を出すかもしれない。記憶のひとかけらが残るような観察会や虫取り体験でありたい。手をつなげなくなった子どもたちが、つなぎ方を忘れないうちにコロナが収束してほしいなと思うこの頃です。（松戸市 藤田 隆）

植物雑感『ヒマラヤスギ』 マツ科ヒマラヤスギ属・Cedrus deodara

秋が深まってくると、公園や大きな庭園に巨大なヒマラヤスギの枝先に卵型のような球果が見られるようになる。公園に出かけて、この直立した松かさ（球果）を見た時には、あそこ、あそこにあると指さしたり、喜んで写真を撮ったりしています。

このヒマラヤスギは明治 12 年に横浜在住のイギリス人ブルークがインドのカルカッタから種を取り寄せて栽培したのが始まり。その実生の苗 100 本が新宿御苑に植えられました。現在は新宿御苑には 380 本あります。（新宿御苑 HP より）

本来はヒマラヤからアフガニスタン地方の標高 1500～3200m に自生する木だそうです。今ではわが国に適応して広く街路樹や庭園樹として大きくなりよく見かけます。和名はヒマラヤ産のスギで、葉の形がスギに似ているからの名とありますが、実はスギの仲間ではなく、マツの仲間です。この為、球果は上向きに直立します。ヒマラヤシーダーとも言います。

成長が早く、大きな樹になり、高さが 50m にも達し、老齢の木は美しい広い円錐形の樹形になり、堂々とした姿は見事です。この形からか、コウヤマキ、ナンヨウスギと共に世界三大庭園樹になっています。学名の deodara はヒンズー語で「神の樹」の意味で神聖な木です。

この樹の特徴は花が秋に咲くことです。花期は 10 月～11 月に 3cm のイモムシ形の雄花が大量の花粉を飛ばしてから木の下に落ちます。時期には木の下は茶色くなった雄花の残骸だらけです。今年の秋に受粉して、翌年の秋に大きな球果になります。球果は熟すと芯から鱗片が外れてバラバラと散ってゆき、最後にバラのような形の先端部が落ちます。この先端部がシダーローズとかウッディローズとの名前です。手芸愛好家には大事な飾りになる感じで、クリスマスリース等には最適な品として、多く使われています。



ウッディローズ

ヒマラヤスギ属は世界に 4 種分布している。有名なのはレバノンシーダーである。



ヒマラヤスギの樹形

他はアトラスシーダー、キプロスシーダーです。レバノンシーダーはレバノン山脈全域に自生していたとあります。レバノンの人々には特別な存在で国旗の中にも描かれています。古代エジプトではレバノンから運んで、ソロモン神殿の建築材にしたり、材が香りのある精油を含んでおり船や棺に使われました。メソポタミア文明はこのレバノンシーダーの森の恵みで支えられていました。利用価値の高い材にて多くが伐採され、現在は自生地では絶滅しかけていて、手厚い保護がされています。新宿御苑にはレバノンシーダーが何本もあります。



球果

小島紀彦（我孫子市）

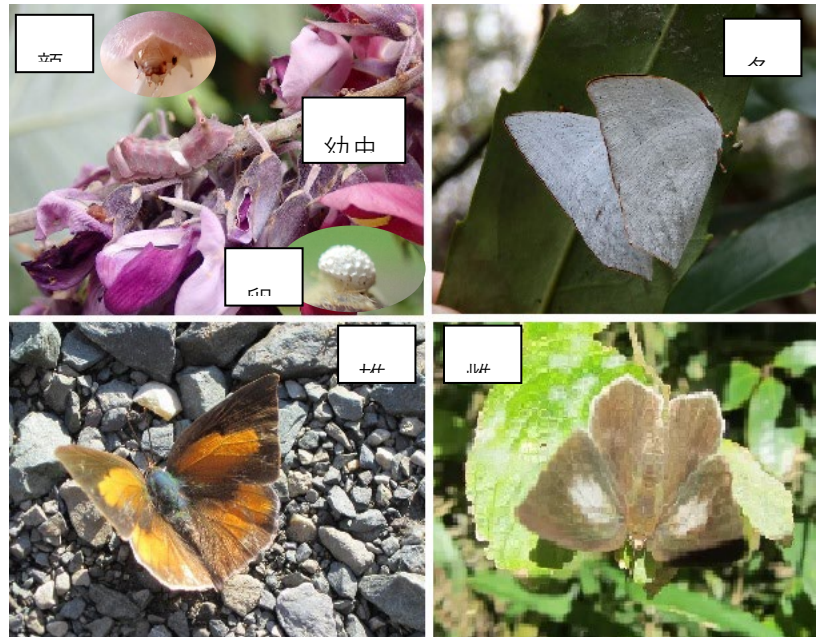
ウラギンシジミ

クズの花の甘い香りを楽しんでいると、なにやら変な形の花びらがある。ウラギンシジミの幼虫、見つけた！ クズの花の色、形にそっくり(*.*) 素晴らしい擬態だ。2つの突起がある方が前かと思ったらお尻。頭のあたりを触ったらこの突起の穴から線香花火のようなものを素早く出し入れした。顔はどこか見えない。動き出したら顔を出した。食草はマメ科のフジやクズなどで花や蕾を食べる。年2~3回発生する。

冬はほとんど飲まず食わずで、暗い常緑樹の葉裏でジューと止まっているのをよく観る。暗い場所を選んでいるのはエネルギーを消耗させないため。寒い冬に耐え、生き残った個体だけが春に子孫を残すことができる。

冬のウラギンシジミの健気な姿は、私に元気をくれる。

山下美佐子 (東金市)



どんぐりを食べる虫

公園に行くと、この時期いろいろなどんぐりが落ちている。地面に落ちているどんぐりはピカピカしていて宝物のようだ。つい拾ってしまう。しばらく置いておくと艶がなくなり、何の傷もないどんぐりから小さな白い幼虫が穴をあけて出てくる。ハイイロチョッキリやシギゾウムシの親は、どんぐりに穴をあけて卵を産む。孵化した幼虫は中身を食べ出てくる。加曽利貝塚にはコナラ(1年で実をつける)、クヌギ(2年)スダジイ(2年)、アカガシ(2年)、アラカシ(1年)、シラカシ(1年)、マテバシイ(2年)のどんぐりの木がある。枝が下の方まであって花や木の実の成長が間近に見られる。木の実が見えるのでハイイロチョッキリやシギゾウムシの仕事ぶりも観察出来る。 松本美千代 (千葉市)



きのこは 生きてるんだね

白井市 小坂 裕子

♪ きのこ ♪

き・き・きのこ き・き・きのこ ノコノコノコノコ歩いたりしない
き・き・きのこ き・き・きのこ ノコノコノコノコ歩いたりしないけど
銀のあめあめ降ったらば せいが伸びてく るるるるるるる
生きてる 生きてる 生きてる 生きてる きのこは 生きてるんだね

き・き・きのこ き・き・きのこ ニョキニョキニョキニョキうでなんか出さない
き・き・きのこ き・き・きのこ ニョキニョキニョキニョキうでなんか出さないが
銀のあめあめ降ったらば かさが大きくなるなるなるなる
生きてる 生きてる 生きてる 生きてる きのこは生きてるんだね

作詞 まどみちお 作曲 くらかけ昭二

はじめてこの童謡を聴いたとき、衝撃を受けました。

そう、そうだ、やっぱり、きのこは、生きてるんだね！！ そう感じた歌詞です。

きのこは不思議な生き物？

植物でも動物でもないような不思議な存在。

先日のNHKサイエンスゼロでも、植物より動物に近いとか、きのこが雨を降らすとか。。

知れば知るほど魅力的。きのこ観察会は人気ですぐに満員になるから早く申し込みしたほうがいいよと先輩からのアドバイス。きのこは自然観察会でも人気者ですね。

この「きのこ」の童謡は、

保育園や幼稚園で、秋になると踊りながら歌われる人気の曲です。

私もキノコになったつもりで、今月は子どもたちと踊っています（笑）。

優しい簡単な振付なので、秋の観察会の準備運動に

いかがでしょう(^^♪

ところで、この童謡の作詞家のまどみちおさんには、

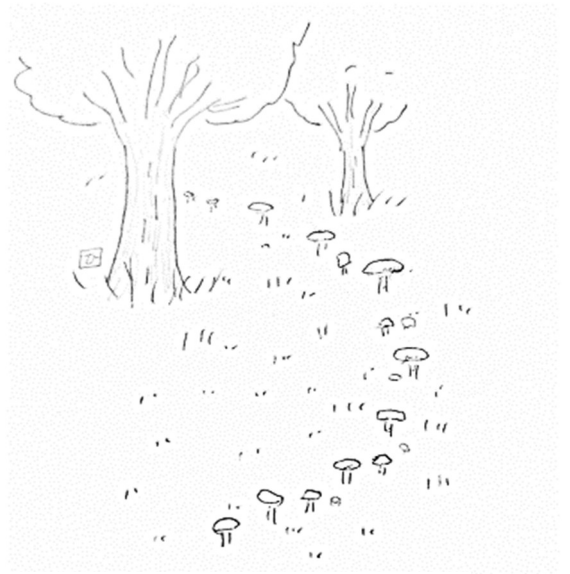
身近な自然を題材にした詩が多くあります。

多くの詩のなかのひとつ、あめのこ(童謡)の

一部をご紹介します。

♪ あめのこ ♪ 作詞 まどみちお

あめのこ あめのこ はじめはどこへ
雲から 山へ
山から 谷へ
谷がわ ちよろちよろ ちよろちよろ ちよろ
口笛ふいて
どんぐりころがし わらびをぬらした



一週間前は、きのこの姿はなかったフェアリーリング
2019年9月、印西市内観察会下見にて

雑草魂と言うけれど

今年の夏の甲子園で決勝戦まで進んだ下関国際高校はかつて部員が 5 名しかいなかった時代や不祥事で出場辞退の年があったそうです。新聞記事によれば監督はこのチームを雑草軍団と称していました。スポーツ界で名を残した人が不遇な時代や試練を乗り越える心の支えに、雑草の生き方を見習ったと言います。これを雑草魂または略して草魂と表現しますが、いずれの言葉も広辞苑にはまだ載っていない新語の様です。雑草は何度踏まれても、刈られても引っこ抜かれても、また同じ場所で生き抜こうと頑張ります。悪状況下でも強く生きようとする雑草のように、諦めず何度でも挑戦する根気強い気持ちに通じるのでしょうか。雑草は踏まれ強いと言われますが、全ての雑草に踏みつけに対する抵抗力がある訳ではなく、特に踏まれ強いのはオオバコでしょう。逆からの見方をすれば、しばしば人に踏まれて背の高い草が耐えられないような場所であれば生きられないスペシャリストです。



踏まれ強さの秘密はしなやかな葉と丈夫な葉脈、地際に低く隠れた生長点にあると思います。オオバコの種子は紙おむつに似た化学構造のゼリー状の物質を持っていて、雨が降って水に濡れると膨張してネバネバする性質があり、その粘着物質で人間の靴や、自動車のタイヤにくっついて運ばれていくのですから、種子散布の為にも踏まれる必要があるのです。そして種が運ばれる先は必然的に踏まれる場所なので効率的な種子散布です。

(左写真 オオバコが優勢な農道)

次に刈られても直ぐに再生、引き抜かれても次々に芽生えるものと言えばイネ科のメヒシバです。

イネ科植物は草食獣の食圧に適応して進化してきたので、地上部が食い尽くされても、地際の生長点さえ残っていればたちまち再生できます。休耕畑では一面メヒシバに覆われる事が草刈機の登場となりますが、一か月もしないうちに何事も無かったように再生します。メヒシバにとっては野牛の群れが通り過ぎたのと同じで遺伝子に組み込まれた想定範囲内だと思います。引き抜いても次々に芽生えてくるのは、休眠するタイプ種子が最初から用意されている事と、耕した時に地中に埋もれた種子が掘り出さるためだと思います。従って草取りとは次の雑草が芽生えるためのスペースを作っているに過ぎないと言いつけています。



(休耕の畑を覆いつくすメヒシバ)

さて、しつこいメヒシバですが、私は畑の仇として全面的に憎んでいる訳では無く利用価値もあります。穂が出る前の青草を刈り取って干し草にすればナスなどの果菜類の根元を保護する草マルチに使えます。草マルチは泥はねと乾燥の防止の他、雑草の芽生えを抑制できます。雑草を使って雑草を制する訳です。一般的なマルチ材はビニールシートですが、これにはお金もかかるし、使用後にゴミとなるのが難点です。その点、草マルチは次第に腐食してミミズなどの土壌生物の餌となり、土に戻りますからごみ処理不要の優れたものと思っています。西アフリカの一部では近縁種が穀物として栽培されてさおり、ホニオというそうですが、英語ではハングリー ライスと軽蔑的な呼び名になっているそうです。

佐倉市 坂本 文雄